

---

## 書 評 ・ 紹 介

---

Paul Boyle, Keith Halfacree and Vaughan Robinson,

### *Exploring Contemporary Migration*

Longman, 1998, 282p.

本書は先進国および開発途上国の国内および国際人口移動に関する、はじめての包括的な人口移動研究の教科書として3人の若いイギリス人地理学者によってつくられた。周知のように人口移動研究は経済学、政治学、地理学、社会学、人口学等々多様な関心から研究がおこなわれており、よくも悪くも学際的な分野となっている。著者らも指摘しているが、多彩な学問分野からの研究成果があるものの、それらが相互に利用されることが少なく、結果的に個々の分野で投入されているエネルギーに比して、全体として共有されている知見は十分とは言えないのが現状である。一方で、国境を越える人の移動は解決すべき現実的課題として近年さらにその重要性を高めているし、社会科学諸分野における人口移動への学問的関心もますます高まっており、この種の教科書と銘打ったものが、始めて刊行されたことに意外な感じさえ受ける。

9つの章からなる本書の構成は以下のとおり。序論である第1章、第2章では人口移動の定義、研究方法が紹介される。計量的な分析だけでなく、聞き取りや参与観察に基づく研究の重要性が指摘されている。第3章は人口移動研究の基本的視座に関する議論。この部分は人文地理学における計量主義、行動主義、構造主義、人文主義等の対象への接近方法の変遷を予備知識としてもっていないとやや難解である。従来の人口移動研究は統計データへの依存度が高かったためか、基本的考え方についての議論が不活発であったと批判している。以下、第4章から第6章では人口移動の説明要因ごとに各章が構成されている。第4章では人口移動は雇用機会と高賃金を求めての行動であるとして、それを経済学的に説明しようとする。第5章は、各人は成長と加齢にともない選好する居住地域が変化し、これが人口移動を引き起こすという立場にたつ。すなわち、親元からの離家による人口移動、結婚・離婚による人口移動、子育てと人口移動、退職と人口移動などライフ・イベントとの関連で発生する人口移動が検討される。第6章では、生活の場としての特定の地域の魅力が人を引きつけるとする「生活の質」を求めての人口移動が論じられる。ここでは、活気に満ちた大都市の魅力、閑静で豊かな郊外の魅力、そして田舎暮らしの魅力等が取り上げられている。これらの章では、人は自由意志から移動をおこなうことが前提となっており、その説明要因が相互補完的な3つの角度から論じられたが、第7章、第8章は操作的、強制的な人口移動を扱う。第7章では、国家による人口移動の操作として、イスラエルやオーストラリアの移民政策の変遷、かつての南アフリカ共和国のアパルトヘイト政策等が論じられている。第8章では、近年その数がますます増加している難民の問題について、その定義、隣国や先進国の受け入れの論理、聞き取りによる現実の難民の体験談などが幅広く記述されている。まとめにあたる第9章では、人口移動は今日の多くの人々にとって、もはや生活の一部のようになっているとの観点から、人口移動はある種の文化だと論じる。

教科書として作られたため図表が多く、補足説明用のコラムも充実し、親しみやすい。ただ、できるだけ多くの情報を盛り込もうとしたためか、やや情報過多という印象を受ける。また同時に、この分野の教科書として記述すべき必要最小限の項目とは何かということを考えさせられた。人口移動に関心をもつ大学院生にとくにお薦めしたい本である。

(中川聡史 / 神戸大学)